

JCB THE PREMIUM

10

October,
2017

[海外特集]

心ほぐれる台北

[国内特集]

由布院 秋のお籠り

[趣味のある休日]

心地よく“身だしなみ”を整える



世界にひとつ。
あなたにひとつ。

第四十二回

『りんご』はノスタルジック

昔の話をしたがるのは、歳をとった証拠。それは良く判っています。でも、もうすぐ還暦。ここらで書き留めておかないと、思い出せなくなってしまうという恐怖感に苛まれているのです。それに、何と言っても今回のテーマは『りんご』。どうか、大目に見てやってください。

とにかく懐かしい思い出が沢山ある『りんご』。ところが、他の果物と比べると、どうも季節感が薄いようです。夏場には早生種の収穫が始まり、初冬まで様々な品種が次々に実ります。その後も、炭酸ガスなどを使った保存法が確立されており、半年以上も出荷が可能。一年中市場に出回っていると言っても過言ではありません。熱を出して寝込んだ時に、母が必ず作ってくれた「りんごのすりおろし」。これを食べられるのなら、ずっと病気でもいいや……と思うぐらい大好きだったのに、季節とは全く結びつかない記憶なのです。

我が家の使いこまれた卸し金は、確か金色でした。真鍮だったのでしょうか。『りんご』はすりおろすとすぐに茶色くなってしまいます。見た目は良くないのですが、一口ずつスプーンで食べさせてもらった、あの何とも言えない舌触り。あまり酸っぱくはありませんでしたから、おそらく『国光』だったに違いありません。



幼児期に獲得した知識は、なかなか忘れられない、いえ、忘れたくないという力が働くようです。当時は、梨だったら『二十世紀』か『長十郎』、バナナなら『南米』か『台湾』と相場が決まっていました。そして『りんご』なら『国光』か『満紅』が二大品種。『千成』の別名もある後者は、東京に出た時に『紅玉』と呼ぶのが正式だと教わります。『満紅』は関東ではタブーだったのでしよう。酸味が強くて、



お菓子やシードルの原料としても最高。今でもこの二つの品種が愛しくて仕方ありません。

青森県の藤崎町で、『国光』と『デリシャス』を交配して生まれたのが『ふじ』。発表は昭和33年。命名されたのはもう少し後ですが、今や世界一の品種です。何しろ、生産量が青森県の百倍以上で、世界シェアが六割近い中国の『りんご』の約三分の二が『ふじ』とのこと。同じ年生まれとしては、若干複雑な気持ちはあれ、大変誇らしく思っています。

甘い『りんご』を料理に加えるという、今では珍しくも何ともないことに驚いたのも、この頃でした。あの衝撃的な『ハウスバーモントカレー』のコマーシャル。もちろん、テレビですよ。

「~~~~とろりとけるリングとハチミツ~~~~」
忘れられないフレーズです。野坂昭如作詞、いすみたく作曲という、まさにゴールデンコンビの作品だと、今回ググってみて初めて知りました。さもありなんですね。「甘いカレーなんて」と大人ぶる友達から馬鹿にされながらも、一貫して甘口好きだということを、白状しておきます。

マクドナルドの『ホットアップルパイ』も、かなりの衝撃でした。昭和46年に日本上陸、その翌年に大阪の1号店がオープン。割引券をもって駆けつけました。現在は『あべのハルカス』になっている場

所です。スイーツ文化も殆どなかった当時、好奇心いっぱいの中2年生にとっては、最高のおやつでした。

武田薬品工業がお米屋さんで流通させていた『ブラッシー』。こちらはオレンジジュースでしたが、その兄弟分に『マリнка』というりんごソーダがありました。これにも一時敬まっています……。

どうも『りんご』のことを考えると、ノスタルジックな話がどんどん出てきてしまいます。これも世代によって、随分違うのでしょうか。

そう言えば、アップル社を創業した故ステイブ・ジョブズ氏。僕より三つ程年上の彼の「りんご体験」には、とても興味があります。きっと大好きだったに違いありません。因みに『マッキントッシュ』は『りんご』の品種名。日本では『旭』と呼ばれています。

辰巳琢郎 たつみたくろう

俳優。1958年生まれ。京都大学在学中に「劇団そとぼこまち」を主宰し、80年代前半の学生演劇ブームの立役者となる。卒業と同時にNHK朝の連続テレビ小説「ロマンス」でデビュー。以来、知性・品格・遊び心と三拍子揃った俳優として活躍中。テレビ、映画、舞台、CMのほか、クラシックコンサートの司会や演出、執筆活動などに多忙な毎日。食通、ワイン通としても知られ、「日本ワインを愛する会」副会長、日本ソムリエ協会名誉ソムリエなどに就任。観光庁アドバイザーも務める。食いだおれの街、大阪市出身。